

可愛い叔母の淫臭～尚美の童貞教育

直輝／NAOKI

第一章

「ごめん。今日遅くなる。ご飯は外で食べてね」

叔母の尚美からの電話だ。

「また夜遊びか……」

スマホのディスプレイを見て宏樹は溜息をついた。時計を見ると午後六時。

あと三時間は帰ってこないだろう。

叔母の尚美は宏樹の母の十歳年下の妹で、宏樹より十歳年上の二十六歳。宏樹の母は四人姉妹の長女で、尚美が一番下の妹だ。今、宏樹とふたりで宏樹の家に住んでいる。

家庭的で清楚な母の恵美や他の叔母たちとは対照的な女だった。母とその下の二人の妹は、世間では一流といわれている大学を卒業している優等生なのだ

が、尚美はそんな姉たちに反発し、高校を中退して家出までした。堅物の三人の姉と比べ、奔放な性格で、若いときは男とも同棲したことがあり、祖父母もかなり手を焼いたというのを宏樹は母から聞いたことがあった。

外資系の石油会社に勤めている宏樹の父の海外赴任が決まり、母も父と同行することとなった。一人っ子の宏樹を心配して、母は宏樹と家の面倒を見るという条件で、家賃に困っていた尚美を自分たちの家に住ませることにした。

他の二人の叔母は小さいころから家にも遊びに来ていたので宏樹も良く知っていた。しかし、遠方に住んでいた尚美は、姉たちの家に顔を出すことなどほとんどなかったので、宏樹は尚美の顔を良く知らなかった。

(どうせ、けばけばしい女がくるんだろう)

宏樹は初めはそう思っていた。でも、その予想は全く違った。

くりっとした大きな潤んだ瞳にすらっと綺麗に整った鼻筋、薄い茶色に染めた髪は上品でさらさらとしており、ピンクのルージュに彩られた唇はぽってりしていて色っぽかった。ぷっくらと膨らんだDカップの大きな胸と、美しく括れた腰、プリットした大きなお尻。週刊誌のグラビアを飾るモデルといっても通用するほどの美貌とボディであった。

両親が海外に出る一週間前、尚美が家に来たときは衝撃的だった。

「へえ、ここが宏樹君の部屋なの」

尚美は勉強中の宏樹の部屋を覗きに来た。可愛い童顔とは対照的な豊かなボディをもった、こんな魅力的な大人の女性と近くで接したことはないうえに、宏樹はまだ女性を知らない童貞であった。甘い尚美の香水の淫靡な香りを吸い込むだけで、青い肉棒がむくむくと頭を持ち上がった。横で尚美の話す言葉を上の方で聞いていた。尚美に勃起していることを気づかれないようにと、硬く怒る肉竿を鎮めのりに必死だった。

そして、尚美が帰ったあと、まだ部屋の中にほんのりと匂っていた香水の香りと椅子に残った尚美の尻のぬくもりを感じながら激しく肉竿を扱きあげ、あのピンク色のぽってりした唇の中で果てる場面を妄想しながら精液を放出した。

その日から、尚美は宏樹の自慰の「おかず」になった。

尚美に、母や他の叔母たちと違うタイプの人間だね、と聞いたことがあった。

「真面目と言っても同じ姉妹よ。お姉ちゃんだって、学生の頃、宏樹君ができちゃったから結婚したんだし。私とそんなに変わらないわ」

母の恵美は二十歳の若さで宏樹を妊娠したため、父と学生結婚し、すぐに宏樹を出産した。そのとき、尚美は十歳の子供だった。

赤ん坊の宏樹と子供の尚美と一緒に移っている写真を母が持っていたので、尚美に見せた。

「ははは、こんな写真あったんだ」

尚美は無邪気に笑っていた。宏樹はそんな尚美に親近感を覚えた。

尚美はその美貌と肉感的な姿態を見込まれ、コンパニオンやクラブのホステスの仕事をしていたこともあったが、今は貿易会社の事務の仕事をしていた。宏樹はそんな尚美にひそかな想いをよせはじめていた。

その日遅くなるという尚美からのメールを受け、宏樹は、下の階におりた。バスルームの横にある洗濯機まで来た。

洗濯は尚美の仕事であったが、尚美は朝が弱く、よく寝坊して洗濯機のスイッチを入れ忘れたまま、家を出ていってしまうことが多かった。今では宏樹が洗濯係であった。

宏樹は洗濯機の中から無造作に丸められた尚美の汚れた下着を取り出した。そして、自分の手の中に小さく丸まって収まっている尚美の下着を目にした。胸の鼓動の激しい高まりを感じた。

宏樹は手の中の布の塊を丁寧に解きほぐしていった。股間はすでに痛いほど膨張していた。

白いフリルのついたビキニスタイルであった。

宏樹はパンティを裏返し、尚美の秘部が直接触れていた白い布地の面をむき出しにした。

そこには淡い黄色や茶褐色のしみが太く長い縦線状に付着し、陰毛が一本絡まり付いていた。男をそそらせる淫らなフェロモンがそのパンティからムンムンとたちこめていた。

宏樹は染みの付いたその部分を鼻の穴に押し付け深く息を吸い込んだ。かすかな尿の匂いと共に、女の特殊な体臭がきつく匂い、宏樹の鼻腔を刺激した。

「ああ、尚美さん、こんないやらしい匂いをさせて……」

宏樹は夢見心地の中で呟きながら、ズボンと下着を一緒に下ろし、振り返ったペニスを取り出した。

ペニスの皮が完全に剥け、大きな亀頭が顔を出していた。その先から透明な先走り液が漏れ出していた。

尚美のパンティの匂いを堪能し終わると、宏樹は大きな露の玉を出している肉棒の先端に下着を巻きつけ、こねるように亀頭をゆっくりと刺激し始めた。

「ああ……尚美さん……尚美さんのオマンコのえっちな汁が僕のちんぽに染み込んでいくよ」

宏樹は独り目を閉じつぶやいていた。

宏樹の脳裏に、尚美が脚を大きく左右に開き、赤い亀裂を宏樹のペニスですりあげている映像が浮かんだ。

「ううっ、気持ちいいっ、もう、出ちゃうよ！ 尚美さん！」

宏樹は尚美の下着に包まれた亀頭を激しく撫でた。歯を食いしばり射精をできるだけ我慢していたが、やがて限界が来た。

「あああっ！」

宏樹は全身を痙攣させながら射精した。大量の精液を尚美のパンティで受け止めた。

「ああ……またやっちゃった……」

宏樹は尚美のパンティにべっとりと付いた自分の精液を啞然と見て呟いた。

「いけない。下着洗うの忘れてた」

深夜、尚美は帰宅するとすぐに洗濯機に向かった。宏樹はすでに寝ていた。

洗濯機は丁度乾燥の動作中であり、生乾きの洗濯物が中で回っていた。宏樹がスイッチを入れたらしい。

「よかった。明日履いていくパンティーなかったから」

尚美はほっと胸を撫で下ろし、シャワールームに向かった。

服を脱ぎ、ピンクのDカップのブラを外した。パンティーを尻から足首へと一気に下げると、脱いだパンティをつまみあげ、目の前にかざしてみた。恥部の触れていた部分の布地にはべっとりと濃い黄色のシミが付着していて、そこ

から発情したメスの匂いが漂っていた。

尚美はその匂いから目をそむけるようにパンティーを丸め、洗濯機の横に置いてある籐の洗濯カゴの中に放り投げた。

尚美は全身にシャワーを浴びながら、先ほどのパンティーから漂っていた淫靡な匂いを思い出していた。

以前より色も匂いもきつくなっていると尚美は感じていた。

(欲求不満なのかしら……)

以前付き合っていた男と別れてから、もう数か月もセックスをしていなかった。

性の快楽を知ったこの豊満な肉体が疼いたときは、火照ったところを自分の指で鎮めていた。指で慰めきれないときは行きずりの男にでも慰めてもらおうと、街にたたずんで男が声をかけてくるのを待った時があったが、いざとなると勇気が出なかった。

そんな日々が続き、寂しさのせいか最近寝る前にオナニーをする癖がついていた。エクスタシーに達し、疲れ果て、そのまま眠りに付いてしまうこともよくあった。

(私って、汚しちゃった下着なんかそのまま無防備に籠に入れたりしてるけど、宏樹って、あのパンティの匂いを嗅ぎながらオナニーしたりしてるのかしら…

…)

宏樹が自分に対し、興味を抱いているということは前から感じていた。また、時折、オスのイヤラシイ視線を感じることもあった。年頃の男の子だから、女の身体に興味を持つのも仕方が無いのだろうと思っていた。

(もしかして、あの子、童貞かな？ 顔もイケてる方だし、きっと、経験してるよね……んっ！？ なんで、こんなことを考えているんだろう？ でも、高校生だから自分で扱っているのは間違いないし……やだあ、なんてこと想像しているんだろう。完全な欲求不満だわ……)

そんなことを考えながら、宏樹がオナニーをしている光景を脳裏に描くと、尚美の息遣いがすこし荒くなった。

シャワーを浴びながら硬くなった乳首をつまんだ。

「あっ！」

身体がぴくっと反応した。そのまま太腿を少し開き、もう一方の手の指先を股間に這わせ、クリトリスを刺激した。

瞬間、尚美はビクッと腰を引き、背をのけぞらせた。

尚美は濡れそばった淫裂を中指の腹で激しくなぞりながら、宏樹のペニスを想った。

大きいの？

小さいの？

皮はかぶったままかしら？

大人の男性のアレみたいに色はくすんでいるの？

自らの卑猥な問いかけに興奮を高めながら尚美の自慰は続いた。

あそこをしゃぶってほしい？

私のを舐めてみたい？

いいわ、好きなだけお舐めなさい。

クリトリスが肥大して腫れ上がるぐらいに思い切り吸い付いて、そして……。

私のオマンコをあなたのおちんちんで突きまくって……壊れる位に激しく…

…。

「あああっ！ いっちゃうっ！」

尚美は宏樹の巨大なペニスで蹂躪される自分の淫らな姿を想いながら絶頂に達した。

(私、どうしちゃったんだろう？ あんなこと想像してオナるなんて……)

次第に正気に戻ってきた尚美は、自己嫌悪と共に宏樹に対する好奇心が抑えられなくなっている自分に気づいた。

第二章

(ああ……尚美さんとセックスしたい)

翌日は土曜日で、尚美は買い物に出ていた。家で一人留守番をしていた宏樹は、まだ想像でしか知らない女の裸を尚美に身体にオーバーラップさせ、股間を疼かせた。

セックスってオナニーとは比べ物にならないほど気持ちがいいというけど、どんな感触、快感があるのか？

早く、したい！

未知の膣の中にこの硬く熱い肉棒を突き刺したい！

尚美とセックスしたい！

早く童貞とおさらばしたい！

宏樹の頭の中は淫らな妄想で満ち溢れていた。

そして、右手が勃起したペニスに伸びた。

「ああ、尚美さん……尚美さん……」

宏樹は目を瞑り、短パンの上から硬くなりはじめたペニスを擦りながら尚美

を想った。

セックスがしたくて欲情の満ちた瞳で見つめる尚美。

我慢できなくて、豊満な乳房を揺らしながら誘惑してくる。

そして、そのままベッドに倒れこんで……。

そんなことを想像しているうちに、ペニスが完全に勃起し、下着を窮屈そうに持ち上げた。右手はズボンの上で硬い幹を往復していた。

「ぐうっ、だめだあつ、我慢できない」

若い性欲旺盛な肉棒が、早く精液を出したいと、下着の中でピクッピクッと暴れだした。

宏樹はもう限界だった。右手は快樂への誘惑に負け、短パンの上から肉棒を揉んでいた。

もし今、尚美が部屋に入ってきたら、尚美に襲いかかって犯してしまうかもしれない。

それほど宏樹は興奮していた。

宏樹は短パンと下着を脱いだ。跳ねるように飛び出した太い肉棒の先からは滲みでた先走りの汁で濡れ光っていた。

宏樹はいつものように精液でベッドを汚さぬように、ティッシュペーパーを敷き詰め、しっかりと肉棒を握り、力強くストロークを始めた。

扱きはじめると、どんどん先走り液が滲んできた。その透明な粘り気のある液体が手の中に入り、滑りをよくし、肉棒を扱う手の動きが速くなっていった。

クチュ、クチュ。

「ああ……気持ちいい……」

パンツがベッドの隅に脱ぎ捨てられて、上はシャツ、下半身丸出しの無防備な姿で、宏樹は夢中で勃起したペニスを扱いた。

「はあ、はあ、はあ……。どう？ 僕のチンポは大きいだろう？」

宏樹の瞳の裏には、自分の目の前で股間を大きく広げて、淫裂を激しく慰める尚美の姿があった。

「はあ、はあ、くうっ」

宏樹は時々足をピンと伸ばしたり、いきそうになると手を休めて亀頭を撫でたりした。

「はああ、尚美さん、尚美さん、」

扱いたり止めたり、たまに玉を軽く搔くように撫でたりしていた宏樹だが、だんだん竿を扱う速度が速くなってきた。

フィニッシュが近づいてきたので、横を向き、亀頭をティッシュの上に持ってきた。

手の動きが早くなる。

同時に足もピンと張った状態が続いた。

「良く見てて！ 尚美さん！ もう少力でイクからっ！」

宏樹の肉棒を扱くスピードが速くなった。

ギシッ、ギシシッ……

ベッドの軋む音が強くなってきた。

「うっ、うっ、うぐっ！ でっ、出るっ、出るっ！ うっ、うっ、うううっ！

くっ、いくうっ！」

扱きはじめて、僅かな時間だった。凄い速さでペニスを選いたかと思うと、手の中で肉竿はズキンと脈打ち、肉棒の鈴口からドクドクと白い液体がティッシュに向かって発射された。

ビクッと微かに動いたあと、部屋が急に静かになった。

萎え始めた肉棒を丸出しのまま快感に浸り、宏樹はしばらく呆然としていた。

勢いよく放たれた精液は広げたティッシュペーパーの上を飛び越し、ベッドカバーまで飛び散っていた。

宏樹はペニスに残った精液を搾り出し、ティッシュを床に投げ捨てた。

「宏樹くーん」

下の階から尚美の舌足らずの音が聞こえてきた。

「えっ？」

放心状態でぐったりしていた宏樹は焦った。ペニスを扱くのに夢中で、尚美が帰宅していたことに気づかなかったのだ。

「あっ、ちょっと待って」

といいながら、急いでベッドから飛び降り、床に落ちていたパンツとズボンを身につけた。そして、丸まって床に落ちていた精液付きのティッシュを慌ててゴミ箱へ放り込んだ。

尚美がギシッ、ギシッと音を立てて階段を上ってきた。

(や、やばい！)

ベッドカバーに付着した精液を拭き取っている余裕など無かった。宏樹は咄嗟にベッドの上の雑誌を手にとって、精液の固まりの上に放り投げた。と、同時にドアが開いた。

「宏樹くん、何してたのお～？」

「えっ……いや……別に……何も……」

何とか恥ずかしい残骸を尚美の目から隠すことはできたが、動揺は隠せず、声が裏返った。

「くすっ、どうかしたの？ 変な声だしちゃって」

「いや……ちょっと……起きたばかりなんで……頭がボーッとしてて」

「あ、ごめん、寝てたんだあ。ケーキ買ってきたんで、一緒に食べましょ」

尚美は駅前にある有名な洋菓子屋の小箱を宏樹に見せて微笑んだ。

「もお、暑くって喉がからから……」

「何か飲み物もってこようか？」

「ううん、自分で取りに行くわ」

尚美は宏樹の部屋にケーキを置いて下に降りていった。尚美が部屋から出て行くと、宏樹はベッドカバーについていた精液をティッシュで拭った。

(ほっ、これで安心だ……)

しばらくして、尚美がコーラの入ったグラスを二つ持って戻ってきた。

「はい、コーラ」

「あ、ありがとう」

尚美はコーラを喉を鳴らし飲んだ。宏樹は色っぽく蠢く尚美の喉を横目で盗み見た。

「ふうっ、生き返るわあ。よおし、ケーキ食べよう」

余程、喉が渴いていたのか、尚美はコーラを一気に半分ほど飲んでそう言った。

「ケーキには紅茶のほうがいいんじゃないの？」と宏樹は言った。

「もう、面倒じゃん。それに、暑いし」

面倒とは、確かに尚美らしかった。

「ここのケーキって、本当に美味しいんだから」

「あっ、うん、有名だからね」

宏樹は尚美に促されケーキの乗った皿を持った。

「いただきまーす」

尚美は嬉しそうに、最初にケーキにフォークを刺し、艶やかな紅で彩られた唇を開き、パクッと口に入れた。

あまりに色っぽかったので、宏樹は尚美の唇の動きに見とれてしまった。

「どうしての？　じっと、見て……」

尚美は口をもごもご動かしながら宏樹に尋ねた。

「あ、いやっ、なんでもないよ」

宏樹は慌てて目をそらして、笑って見せた。

「ねえ、早く食べてみてよ。すごく美味しいから」

尚美に促されて、宏樹はケーキを口に入れた。

「どお、おいしいでしょ？」

「あっ、うっ、うん」

とは言ったものの、色っぽい尚美の唇と張り出した大きな胸が気になって、宏樹にケーキの味を楽しむ余裕はなかった。

「もお、感情こもってないぞ」

「いや、そんなこと……ないよ」

尚美はもう一切れケーキを口にいれ、グラスを手に取ってゴクっとコーラを飲んだ。僅かな時間だったが、尚美の唇の動きがスローモーションのように感じた。

(ああ……ヤバイ……)

先ほど精液を放出して萎えていたはずの宏樹の肉棒に再び力が漲ってきた。

「ねえ、宏樹くん、どうしたの？ さっきから変よ？ 体調でも悪いの」

「えっ、そう？ そんなことないけど」

と、惚けながらケーキを食べたが、緊張と羞恥心で耳たぶまで赤く染まっていた。

「なに、赤くなっているの？ 熱でもあるんじゃない？」

そういつて、尚美は宏樹のおでこに手を当てた。

「あ……」

宏樹の胸は高まった。

「なんでもないよ。大丈夫だよ」

「そう？」

そういつて、尚美は宏樹の顔を覗きこみ、目を見つめた。

「え……なに？」

「ねえ……もしかして……私のこと好きだったりして」

「えっ……？」

ずばり確信をつかれ、宏樹の身体は固まってしまった。

「うふっ、図星？」

「え……あの……」

宏樹の興奮はピークに達した。短パンの中の肉棒がビクンッと脈打った。

「コーラのお代わり持ってきてあげるよ」

そう言って、宏樹は空いたグラスを持って、慌てて部屋を出た。

宏樹がいない間、尚美は残りのケーキを食べて宏樹の来るのを待っていた。

ケーキを一切れ口に運ぼうとして、うっかり、スカートの上に落としたりした。

「あ、いけない」

尚美はスカートの上からケーキを除くと、バッグからポケットティッシュをとって、服に付いた生クリームを拭き、ティッシュを丸めてベッドの横のゴミ箱に入れた。

ゴミ箱の中を覗くと、自分が捨てたものより大きなティッシュの塊りが目にはいった。尚美は気にも止めず顔を上げた。そのとき、ゴミ箱の中から仄かに青臭い男の匂いが漂ってくるのを感じた。

「えっ？」

尚美は我に帰って再びゴミ箱の中を覗き込んだ。胸が急に高まってきた。

(もしかして……宏樹くんのあれのあと……?)

そっとゴミ箱の中に手をいれ、大きな塊りを指で摘みあげた。それはずっしりと重く、生臭い匂いが微かに鼻に入ってきた。

(この匂い!)

久しく嗅いでいない妖しい匂い……。

官能的な記憶が尚美の脳裏に蘇った。

尚美の心がざわついた。

中を確認しようと、そっとティッシュをめくっていった。中から黄色みがかった粘っこい液体が糸をひいた。

間違いなく宏樹の精液だった。しかも、まだねばっこく、匂いもきつかった。

(やっぱり……まだ、新しい……さっきしたばかりなのね……)

宏樹が激しくペニスをしごく姿が浮かんだ。

尚美の股間がずきんと疼いた。尚美は思わずきゅっと両の内股を擦り合わせた。

尚美は男性経験は豊富であったが、実際に男の自慰行為を見たことはなかった。昔から男のオナニーには興味があり、これまで付き合ってきた男にも、オ

ナニーを見せてくれと何度も言おうとしたが、果たせなかったのだ。

(だめっ！ 変なことと思ったら)

尚美は頭を横に振った。

(これは男の子の自然の行為。別にいやらしいことじゃないんだから。ただの生理現象なのよ。それに、宏樹くんは私の甥なんだから)

尚美は欲情への誘いを否定しようと心に言い聞かせ、ティッシュを丸めなおしゴミ箱へ返した。

(体験版はここまでです。本編を買っていただけると嬉しいです。よろしく願いいたします。)